愛を伝えたい

『古典の女』の恋はキラキラまぶしい……

清川 妙

Love is burning,
passionate,
bitter and soulful thing.

愛を伝えたい
『古典の女』の恋はキラキラまぶしい

著者：清川　妙
発行者：大和和明
発行所：大和書房〒112 東京都文京区関口1-33-4　☎03-203-4511
振替：東京6-64227
印刷所：暁印刷
製本所：小泉製本
装幀：神崎夢現
装画：中島達雄

乱丁本・落丁本はお取替します
ISBN4-479-05021-3
©1988, T. Kiyokawa Printed in Japan

Lady's
Library

愛を伝えたい

『古典の女』の恋はキラキラまぶしい

はじめに

北イタリアのベローナを訪ねたとき、シェークスピアの『ロミオとジュリエット』の、ロミオの家と伝えられる古い建物の壁に、こんなことばを刻んだプレートがうちつけてあった。

「ロミオはいったいどこにいる？　私は自分を見失った。ここにいるのは私じゃない。ロミオはどこかほかにいる……」

恋の闇に迷って、ここにいるのは自分か他の人か。魂が宙に浮いたようなせつなさを洩らすロミオのせりふだ。古典の中の恋のことばをそのまま観光のメッセージに使うとは、なんと粋なことか、と私は感心した。そして、これとそっくりの情感の歌が、日本の古い平安の物語――『伊勢物語』の中にあることを、熱いなつかしさで思い出した。

君や来しわれや行きけむおもほえず夢かうつつか寝てかさめてか

あなたがいらっしたのか、私がいったのか、無我夢中のできごとで、夢か現実か、寝ていたのか覚めていたのかわかりません。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

許されぬしのび逢いのあと、女が男に送った哀しみの恋の歌である。
シェークスピアのロミオのせりふと、『伊勢物語』の歌と、その思いはぴったりと重なる。
古典というのは、私たちの先祖が私たちに残してくれた、いわば美しい宝石のような、文学の遺産。胸の底のいちばん深いところから発した心情は、時とところをへだてても、おなじように人の心をうつ。
とくに日本の古典は、四季おりおりの風物に重ねられ、とりわけ繊細、とりわけやさしくあでやかに、私たちの心にひびく。だが、それはけっして古めかしくむつかしいものではなく、新しい感覚のライトをあてて、じっくり読んでみれば、いまの私たちの心をもうちたたいてやまない鮮烈な感動を持つものである。
古典をいまふうなセンスで紹介したいという夢を、私はいつも胸にかかえている。古典はいまも確かに現代に生きて、いきづいているからである。この本には、私の好きな古典の、好きな場面ばかりを選んでみたが、この中に登場する人々の心と、読者のみなさまの心はぴったりと重ね合わされるにちがいない。
登場人物のどの思いも、どの恋も、けっして乾からびた過去のものではない。うてば響いて、現代の私たちの心をつよく揺さぶるのである。
自分の胸だけにしまっておくには惜しいこんな古典のかずかずを、私は心の抽き出しをあけて、そっとお目にかけたのである。それは、女が自分の小だんすの抽き出しをあけて、買いた

めた好きなスカーフのあれこれを、仲良しの友達に見せ、ときには相手の首にも巻いてもらって一緒に愉しむ、そのひとときの心のときめきにも似ている。

あなたはどの章がお好きだろうか。どの古典の、どのひとの心がいちばんあなたの心に触れて、いきづくことだろうか。

愛を伝えたい——目次

第一章——花の恋

あふれる恋心はいのちも賭ける——『古事記』の磐姫皇后と女鳥王　…12

愛するときは、いのちをかけて——それは、まるで童女のひたむきさ、春の日に照りかがやく、真紅の、いのちのいろの恋

いちずな青春のメモワール——『伊勢物語』の男と女　…29

彼女はまどいを消し、悩みを拭うために、化粧するのだ。さあ、美しくおなり、と自分を励ますのだ。

光る感性につながれた女同士の愛——『枕草子』の清少納言と定子中宮　…44

季節でいえば、初夏の向日性。彼女は、現実にはどんな苦しいことがあろうとも、いつも明るみに向かって歩いていこうとする

第二章——空の恋

噂の女は孤独な魂を抱きしめる——『和泉式部日記』　…62

彼女は、自分の心の真実を貫いて生きた——〝悪女〟とか〝不良〟とかいわれ、世間のごうごうたる非難を浴びながら

拒むことによって恋は昇華する——『源氏物語』の空蟬　…76
彼女は拒むことによって、かえって、いつまでも愛の余韻を残した。これはかなり高度なテクニックのいる、おとなの愛だ

夏の恋は万華鏡——『万葉集』相聞歌　…90
ひとを愛するその心も、いまよりはるかに素朴で誠実で、ふかぶかとしていたであろう。花々もひとの心も、身にしみて慕わしい

女の中に息づく魔性——『堀川波鼓』のお種　…104
貞淑な女の中に、魔性の女も棲んでいる。たてまえの生き方からあやまちはふとこぼれ出る。それが人間の弱さ、人間らしさ

第三章——夢の恋

亡霊となってもあなたを待ちたい——『雨月物語』の宮木　…116
うつしみの肉体と、あの世からの魂の結合を示す、いわば、愛の極地の、そのもの哀しさの余韻がゆらめいてやまない

夢を封じこめた可憐な女の自分史——『更級日記』　…130
物語にあこがれた女は、自分の人生の中から、砂粒ほどの夢の種子を拾いあげて、この可憐な日記の中の芯にした

死の絆に結ばれた男たち——『平家物語』の木曾義仲と兼平　…145
幼い日から死の日まで——彼らの魂は相寄り、絆に結ばれ、戦乱の世をひとすじに生き、青春の愛に殉じた

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

一度決めたらゴーイング・マイウェイ——『平家物語』の仏御前　…159
その強烈な青春の生きかた——彼女はたったひとりで考え、たったひとりで行動する。即断即決。哀しいまでに潔い

第四章——雪の恋

亡き人とともにわたしの青春は終った——『建礼門院右京大夫集』　…172
亡きひとと一緒に閉じこめた青春。あのひとが亡くなったときから、私も共に死んだ。そのあとの人生はおまけ
恋のプリズムはどんな色——『百人一首』　…188
さまざまな恋の歌を通してのぞきこんでみよう。その勧び、その哀しみ——恋の種々相に寄せるひたすらな思いを
二人の男性を同時に愛せるか——『源氏物語』の浮舟　…202
禁断の恋のせつない甘さ、ときめき——彼女は、ふたりの愛の間に、中空の雪のように消えてゆくしかないのか
あとがき　…216

第一章——花の恋

あふれる恋心はいのちも賭ける

――『古事記』の磐姫皇后と女鳥王

全身であらわすひたむきさ

仁徳天皇の皇后磐姫（石の日売）は狂おしいまでの恋の激しさを持った女性であった。恋するときも恨むときも、いちずに全身全霊をかたむけた。

世の常の容れものにおさまりきれぬ恋ごころは、ときに、悲しくあふれこぼれた。

磐姫皇后が、夫の仁徳天皇に寄せた四首の歌は、『万葉集』巻二の相聞（恋）の巻頭を飾っている。これは当時の伝誦歌を磐姫の作に仮託したものといわれるが、この歌の中にも、纏綿とした情熱の濃さと、血を吐くような激しさで相手に迫るひたむきさを見る。

君が行き日長くなりぬ山たづね迎へか行かむ待ちにか待たむ

かくばかり恋ひつつあらずは高山の磐根し枕きて死なましものを
ありつつも君をば待たむ打ち靡くわが黒髪に霜の置くまでに
秋の田の穂の上に霧らふ朝霞何処辺の方にわが恋ひ止まむ

あなたは、いったいどこにいらしたのかしら。私、ずいぶん長い間、ひとりぼっちで、あなたを待っています。いっそ、思いきって、私のほうから迎えにいきましょうか。それとも、このまま、じっと待ちましょうか。

ああ、この胸をかきむしられるような苦しさ。こんな思いをするよりも、いっそ、死んだほうがまし。山深い墓の中に葬られ、岩を枕に眠ったほうが、ずっと楽になるでしょうに……。

でも、やはり、このままずっと、あなたを待ちつづけていましょうか。この長い黒髪に霜の置くまで、いつまでも、いつまでも。

秋の田の稲穂の上にたちこめる朝霧は、いつか、いずこへともなく消え去ってしまうけれど、私のせつない恋の思いは、いつになったら消えてくれるかしら……。

嫉妬心の裏の恋情

仁徳天皇といえば、高殿に登り、民の家から煙が立たないのを見て、その貧しさをあわれんで、三年の間、課税を免じたという情深さで知られる。

でも、女性関係においては、天皇はかなり浮気っぽいかたであった。「君が行き日長くなりぬ」という孤独と焦燥は、磐姫の実感であったにちがいない。

『古事記』には、こうはっきり書いている。

その大后石の日売の命、甚多く嫉妬みしたまひき。

磐姫は非常にやきもちをやかれた。という意味である。やきもちのあまりのすごさに、宮中の女性たちは、恐れおののき、天皇のお部屋をのぞきみることもできなかった。彼女たちがちょっと気になる言動でもしようものなら、磐姫は「足も足掻かに」――つまり、地だんだ踏んでくやしがられた。

磐姫の物語は、『古事記』にも『日本書紀』にも語られているが、いま、私はほとんどを『古事記』にそってお話ししてみよう。

天皇は、そんな皇后の目をぬすみ、というよりもかなり居直って、美人の評判高い黒比売を、吉備（岡山県）から難波（大阪）の宮に召し出された。しかし、黒比売は、皇后の激しい嫉妬に恐れをなして、たちまち吉備へ逃げ帰った。天皇は高殿におのぼりになって、黒比売の船がはるか海上を行くのをごらんになり、恋の歌をおうたいになった。「ああ、いとしい黒比売の乗るその小船よ」と。その歌は、磐姫の嫉妬の炎をさらにあおった。彼女はただちに使者をやり、

黒比売を船からひきずりおろし、陸路を歩いて帰らせた。天皇もさるもの、一計を案じた。「淡路島を視察にいってくるぞ」と言って、吉備の国にしのんでおいでになったのだ。天皇にさしあげるお吸いものを作ろうと、黒比売はいそいそと、手ずから青菜を摘む。つかのまもそなたといたい。天皇も畑までついていらして、こんな歌をお詠みになる。

山県に　蒔ける菘も、
吉備人と　共にし摘めば、
楽しくもあるか。

わずらわしい宮中を逃れて、おまえとふたり、こうして山の畑に青菜を摘む楽しさ。このひとときが永遠につづけばいい……。

この当時は、若菜を摘み、そこで料理して食べるのも、貴族たちの優雅な遊びのひとつ。皇后の目の届かないところで、二人はピクニックをたのしんだのである。

だが、黒比売の女ごころは、天皇ほど単純ではなかった。難波の宮の、あの后の、はげしい妬みの顔が、声が、いまもよみがえる。そして、彼女は恋する者の勘で、知ってもいたのだ。いま、目の前に愛をささやいておられる天皇もまた、そんな后を、真実は、心の底では、深く愛しておられるはず、と。

すこし、声をしめらせて、黒比売は歌をさしあげた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.